

協同的な創造活動における学びの深まり —小学校体育科「リズム遊び」における児童の気づきと パフォーマンスの関連の検討—

○湯浅理枝（広島文化学園大学）

山崎 晃（広島文化学園大学）

キーワード：協同学習，リズム遊び，深化プロセス

問題と目的

小学校の授業ではこれまでもペア学習やグループ学習，クラス全体での協同学習など他者との相互作用の機会は多く存在してきた。しかしながら，リズム系ダンスの授業に関しては，主に子どもが主体的に取り組み，他者と協働して問題を解決していくという指導法を取り入れた単元構成や成果報告（e.g., 成瀬, 2013; 古川, 2011; 原田, 2016）であり，学習者の学びのプロセスや深化を促進する要因についての検討が必要である。

本研究では，ペアでの創造活動「リズム遊び」の協同学習授業において，児童がどのような学びを深めたのかを，児童の相互作用による「気づきの変容」と「パフォーマンス」との関連から明らかにすることを目的とする。

方 法

対象および実施時期

対象者は公立小学校2年生男女30名（各15名）。調査時期は2020年2月17日～28日，全4時間での実践を行った。

単元の概要

第1時は，担任教諭やペア間での模倣活動を通して動きの獲得，第2時は，動きをペアで自由に選択，組み合わせて踊る，第3時は，着目部位を相互に観察しながら踊る，第4時は，創造性の深化をねらって，ペアでアレンジを入れて踊る，活動を行った。

分析

児童のパフォーマンスは，湯浅他（2020）を参考に，①「リズムにのって踊る」，②「動きを組み合わせて踊る」，③「おへそを弾ませて踊る」，④「全身を使って踊る」の各要素を3段階で評価した。また，児童同士の相互観察による気づきについての振り返りカードの記述については，「KH Coder」を使用し，共起ネットワーク分析，対応分析を行い，特徴語等を捉えた。

結果と考察

パフォーマンスについて

4つの要素それぞれについて，時間ごとの推移の結果を示す（Figure 1）。どの要素についても，回数を重ねるごとに「3」と評価される児童数が増加していた。

授業が進むことと児童のパフォーマンスとの関係を明らかにするために要素②と要素③について

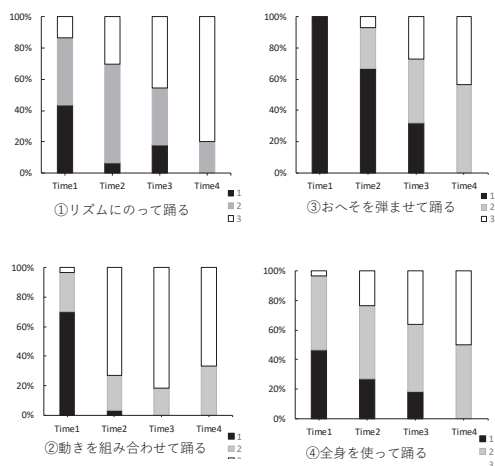


Figure 1 パフォーマンス評価の推移

時間間の順位相関係数を求めた（Table 1）。その結果，第2時の評価は第3時以降においても評価が高く学びの連続が示された。対角線上側は要素②と各時間を，下側は要素③と各時間の相関係数を示す。

気づきの変容について

児童の毎時間の気づきの記述について対応分析を行った。その結果，成分1は「観察可能な部位」，成分2は「観察可能な動き」と命名した。これらの成分をもとにすれば，時間毎に観察可能な部位が焦点化されてきており，観察可能な動きも具体的になってきていることが明らかになった（図はポスター発表時に掲示する）。

総合考察

これらの結果から，授業が進むにつれ，相互観察での児童の観察眼の洗練はパフォーマンスの向上に貢献することが示唆された。パフォーマンスの向上は創造活動における児童の創造性の触発を促進したかについては今後の検討課題である。

Table 1 要素②と要素③の順位相関

		要素2		
		第2時	第3時	第4時
要素3	第2時		0.661	
	第3時	0.490		0.624
	第4時	0.535	0.413	